授業方法について独自に工夫していること【人文社会系】
語学のコミュニケーション授業なので、小人数でいろいろな活動ができる。
この授業はほとんど英語で行われた。
地誌概説Ｉでは、事前に資料の配付を「学びネット」を利用した。大半の学生はあらかじめそれを印刷して授業に臨んでいた。事前に資料を見ることで授業内容を予習することも可能であると考えたからです。しかしアンケートの自由記述には、「全員が家にネットワーク環境を備えているわけではないので印刷して配布してほしい」との指摘・要望があった。家にネットワーク環境がない場合、学内のネットワークを利用すれば良いと判断しています。100人以上に対して数ページのカラー印刷をした資料を配付することは困難であるから。その他の授業に関しては、独自の工夫といえるものはありません。
教員免許状を取得するのに必修の科目であるため、教員になった時に困らないような知識が身につくようテキストを選んでいる。また、履修者数が多いので、一方的な授業になりやすい。２、３回に一度ぐらいは発言できる機会を作っている。
国文学演習では、発表のための事前相談を義務化している。この事前相談において、どのような作業仮説を設定するのか、どのような資料を調査するのか、などのディスカッションとガイドを行う。学生によって時間は異なるが、一人（あるいはグループ）あたり、最短50分から最長4時間程度の相談時間を設けている（個人・グループの相談回数は、およそ2回から3回）。平均時間を計算したことはないが、ひとり（あるいはグループ）あたり1時間半から2時間程度だと認識している。また、独自の質問・感想シートを用意している。
社会学の調査方法について、なるべく実践的に学ぶ形をとるようにしている。またその結果について分析し考察することについても、具体的な実践事例をもとにすることで、結果について自らのリアリティ感覚と対照しながら行うことができるようになるとともに、自分が行ったのではない様々なメディアや官庁などの調査結果を見てゆくときのリテラシーを高めることができるよう考えている。また討論によって、多様な視点からの分析や考察ができるよう図っている。
自著を教科書にして、自作の動画講義も活用している。
班別のレポートなので、最初の班については、研究室に呼んでレポートをどう作成するか指導している。
文学の流れを話す回を半分、上代・中古・近世各時代で論じた自説紹介の回を半分として、深く学べるよう工夫している。
卒論を英語で書くための書き方について、過去の卒論を参考にしたりしながら、演習形式で授業を行っている。また、毎回、自主学習を確認できるように、英語表現等の小テストも行っている。
物事の多様な見方を理解すると同時に、自分の持っている価値観を自覚し表現することを期待して、ペアになって意見交換する機会を多く設けた。

授業前半で、三種類の季節認識（節月・暦月・自然暦）の相違点及び相互関連性について説明し、それを踏まえて古今集四季部の短歌読解をさせ、そこに歌われる季節概念が三種類の季節認識のいずれに拠るものであるかを識別させつつ、短歌の精確な読解をさせた。その際、句読点の重要性を具体的に悟らせるべく短歌の読解の際も原文に句読点を打たせ、句読点の読み方・打ち方を常に皆でチェックした。また、文脈を認識すべく傍線を付すなどの工夫もした。授業後半で行なった古今集恋部の読解では、句読点を付す方法だけでは不十分で、細切れにされた文脈を捉える為に傍線を付す方法を多用した。 また、レポーター以外の学生が単なる聞き役に回らないように、毎時限発言回数を記録し、発言を促した。
１００名近い履修者に対する講義だったが、毎時間授業後に必ず200字の意見文を提出してもうらうようにした。 次の時間の冒頭に、必ずその意見文をいくつか紹介したり、グラフにして学生に提示するなどして、 学生の意見へのレスポンスを施すように心がけた。
学生の発表に補足する形で講義形式に授業を行い、実際に書くことで体験するという、調査発表→講義→体験の授業内実施を意識して行った。
今年度は「アメリカにおけるジャズ音楽の歴史」について講じたが、全体としてジャズの発達過程が一望できるような歴史的な視点と、個々のジャズ・プレーヤーの卓越した技量に基づく実際の演奏の素晴らしさといった具体的な視点の両方をバランスよく提示することを心掛けた。
異文化コミュニケーション論は100名受講の1年生向けの授業であり、知識をつけてもらうために講義が大半を占める。ドキュメンタリーのDVDやネット動画も使って飽きない授業を心がけている。（ただし、授業者の力不足もあるが、全員を授業に集中させるのは至難で、態度の悪い受講者にはストレスがたまった。現代学芸課程の改組転換に伴い、授業が終了したことは授業者には幸いであった。） 言語学研究Iについては、今年度は使いやすい教科書が発売されたこともあり、採用した。平易な記述なので、授業外などに読んできてもらい、説明が必要な部分のみ詳しく解説した。ほぼ毎回、小テストを実施した。学んだことの確認と応用のためのテストであり、暗記を必要とするものではないので、内容によっては教科書を見ながら考えてもらった。
今期の3年生用政治学ゼミについては、日本語文献を読み、討論力をつけるためのゼミ（現代学芸用）、および、英語の研究書を読み通すゼミ（教員養成課程、自己評価対象授業）の二つを開講することができた。この二つのゼミを通して、読解力・討論力・プレゼン力・会議運用能力などを総合的に高めていきたいと考えていたが、授業コマ設定のミスにより、教員養成課程の学生にとっては、現代学芸用ゼミが必修授業と被ってしまい、片方のみの受講とさせてしまったことは大きな反省点である。 来期については、現代学芸用ゼミと教員養成課程用ゼミの中身を入れ替えて開講するほか、一方の必修と重ならないよう配慮したいと考えている。
これらの授業の形式は、民俗事例をVTRで具体的に示しながら講義を進めるというものである。毎回、授業の始めに、その回の内容や映像（事例）のとらえ所など、授業の目標を明確化する。また、授業の受け方、ノートの取り方、授業と試験の関係など、第1回目のオリエンテーションにおいて丁寧に説明する。ただ映像を見せるのではなく、映像をとおして民俗事例の具体的な理解をめざすとともに、いかにノートに内容を定着化させるかにも、力点を置いている。授業のノートは取材ノートに相当するものとして、最初の数回は授業をとおして、どのようにノートを作成するかの説明に時間をかけている。
できる限り、日常の言語活動との関連で授業内容を捉えることができるよう、課題や話題を用意している。
「おくのほそ道」という作品を半期で全文読み通すこと、全１５回という回数で収めること、二十五人全員に人二回ずつ発表の機会を設けること、の3つの条件をクリアするために、計画や発表方法の指導などに苦心した。

教員からの一方的な受け身の学習になるのではなく、学生自身の主体的な学びとなるよう、課題解決と発表、質疑応答の機会をどの授業にも何らかの形で必ず設けるようにしている。 受講人数が多い場合には、個別の学生の発表に対してコメントする時間が制限されてしまうのが苦慮している点であるが、可能な限り、発表させっぱなしではなく、それに対するフィードバックを与えるように留意している。 また、発表を行うだけでなく、ともに学ぶという観点から、受講者同士が発表に対して意見交換を活発に行える環境づくりを最も意識している。
基本的な事項を教えて上で、学生に考えさせるような発問を与え、定期的に討論のための時間をとるようにしている。
動画を多く活用し、力学を実際の場面から、理解できるように示した
講義はともすると一方通行になりやすいので、適宜学生に質問を出し、それについての質疑応答を展開することで、講義をさらに深めていくことを意識した。その場合、当該学生と一対一になりやすいので、教室全体で問題を考えてもらうよう工夫した。
学生自身に中国の新聞サイトを閲覧して、講読文章を選択させることで、普段あまり見ることがない中国の新聞サイトを閲覧する機会を確保した。
時折グループワークを取り入れ、一人で考えるだけでなく考えあう作業を行った。 辞書を引く習慣がついてないため、辞書を持参させ、実際に辞書を引く作業を繰り返すことでその漢文学習における必要性について実感させた。
教育学部であるため、初学者ばかりだと想定し基本用語や基礎概念を繰り替えし伝えることは意識している。 また、1年次必修の授業では工場見学を行う、上級生の科目では外部の実務家を呼んで講義してもらうなど、机上ではなかなか分かりずらい経済について、なるべく実感を持ってもらうことも意識している。
本講義では、おそらく高等学校までの社会科ではほとんど触れられることがなかったと思われる中東欧の現代史を扱ったので、なるべく多くの地図・画像をスライドで示して講義を行った。また配布する資料に関しても講義を受けるにあたって知っておいてほしいことを事前に配布して講義内容が理解しやすくなるように努めた。
・その時間に話すべき内容を明確に整理する。 ・提示する資料を的確にセレクトする ・板書の内容をしぼり、まとめておく 以上の準備の上で ・なるべく学生に分かりやすく講義するよう努力するなどの当たり前のことを、しっかりとやっていくように注意することがすべてである。
教科書に準拠した授業であったため、まずは教科書の内容を正確に理解できるような配付資料の作成を心がけた。しかしそれだけにとどまらず、実際の日本の法制度についての理解を深めてもらうため、資料には写真などの視覚的な情報も盛り込み、講義では身近な問題意識を持ってもらえるような話題を提供した。
基礎を繰り返ししっかり説明すること。具体的事例と理論的解明がうまくかみ合うように、講義の流れ、組み立てをよく練ること、コメントシートを活用し、受講者とのやり取りを促進すること。
司馬遷『史記』についての授業では、学生自ら『漢書』の当該部分との比較を行って、『史記』と『漢書』の執筆態度の違いを考察し、意見交換を行った。

内容が漢字についてだったので、改めて漢字に興味を持ってもらえるように、新漢字を自分で創作する課題や、複数の辞書を引いて難漢字を調べる課題を出した。
発表担当者以外の学生を積極的に参加させ、問題意識を持たせるため、毎回コメントシートに意見・質問・感想を書かせている。 問題点等を共有するため、コメントシートは毎回、全員分を全員にコピーして配布し、補足説明等を行っている。 くずし字の指導においては、机間巡視して質問を受け付けやすい環境をつくるよう務めている。 発表担当者には、発表前週までにレジュメをメール添付で提出させ、改善点などを指導している。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。　【人文社会系】
筆記試験や授業能動や宿題（基本的にシラバス通り）。
すべての授業で、出欠はとっていますので、出欠も成績評価の際の判断基準にしています。地誌概説Ｉでは最後の試験成績を80点満点として、出席点を20点としました。欠席の回数により出席点から減点を行い、総合成績としました。地誌概説Ｉでは8人（6.8%）が不合格（内途中放棄者は4人）でした。試験結果としては、予想より悪かったという感想です。その他の授業では発表内容と出欠により成績評価を行いました。
学期末に行った筆記試験と出席状況
１発表内容、２発表資料、３発表態度、４質疑応答の態度・参加度合い、５レポートを総合的に判断した。ただし、５は、１および2の内容をレポートにする。５の評価基準としては、レポートしての要件と、１および2で指摘された改善点がどこまで達成されているかをその指標としている。４の達成度が低い場合は、減点を行う。
授業に基づく調査の実践、授業内のプレゼン、またテキストの発表と読解力、プレゼン力、授業内討論の参加、また持ち込み可のテストを実施した場合は、理解力、叙述力など。
レポートをメインに、授業態度（欠席数等）を加味した。
班別レポートと期末テストをメインに、授業態度（欠席数等）を加味した。
レポートをメインに、授業態度（欠席数等）を加味した。
日々の小テストおよび定期的な課題を総合的に評価している。
論述問題においては、情報の正確さ、論旨の整合性、視点の多様性から採点を行った。 設問ごとに、解答の基準をつくり、どれだけクリアできているかに応じて、A＋・A・B＋・B・C・Dとレベル分けをし配点した。また、授業中の感想などの小レポートや、授業中での積極的な発言などで優秀だった学生に対しては加点を行った。
レポート評価を中心に、授業態度・出欠情況・発言回数などを加味して、総合評価した。レポートは、①自分の頭で考察しているか②論立てができているか、の２点を重視し評価した。 古今集の四季部・恋部の短歌を精確に読解させるこの演習は極めて難易度が高い授業であったが、受講生達はよく頑張ってくれた。
最終レポート内容を重視したが、それだけではなく、毎時間提出された意見文の内容も踏まえて、 講義の理解度を確認しながら成績を出した。 欠課数があまりにも多い者に対しては、低評価とした。
主としてレポートと発表。レポートについては指示した内容がきちんと踏まえられているかどうか。発表については、テキストに載っている以上をどれだけ調べるか、特殊な用語や難読の人名、固有名詞も多いので、きちんと調べて発表できているかを重要視した。テキストをしゃべっているだけではどうしても評価を下げざるを得ない。とりかかりにくい内容ではあるものの、よく調べようとしてくれたのはわかるが、もっと調べられるのでは？と感じる。
ジャズの歴史には、歴史の流れが変わるような分岐点となる出来事がいくつかあるので、そうした歴史上の重要な出来事の概要と、その歴史的な意義を十全に理解しているかどうかを計る記述式の試験をし、その理解度に応じて成績をつけた。

異文化コミュニケーション論では、授業中に書かせる課題（6回）、宿題として課したレポート（最初に出した課題を、改訂させて二度出させるようにした）などで評価した。 言語学研究Iでは、ほぼ毎回の小テストによって評価した。
成績については、ゼミ中の参加度、予習の程度などを軸とし、最終レポートの結果を加味して判定した。なお、最終レポートについては、添削を行い、個別に指導していければと考えていたが、一部の学生については個別指導が後期にずれこんでしまっている。 4年生の卒論指導をしていて痛感することだが、1年次からの継続的な論文指導はやはり必要である。だが、教員の負担が大きくなることも事実であり、どのようにして体系的に「書く」訓練を実施していくかは今後の課題である。
「日本民俗文化概説」では、授業期間中に、自筆ノート持ち込み可の中間筆記試験をおこない、学期末にノート持ち込み不可の期末筆記試験をおこなう。中間試験の結果約40%、期末試験の結果約60%の合計で成績を出している。 「日本史特論Ⅲ」では、ノート提出と、授業の内容の延長線上に各自にテーマを設定させて、自らが民俗事象について図書館や博物館などで調べるという課題のレポートにより成績を出している。
授業目標の根源的なところについて受講者なりの理解が得られたのかどうかを、試験や通常の授業に対する参加態度等によって評価した。
一回の発表につき、①朗読の表現力②資料調査③地図や図版の活用④考察の充実度の四つの観点で点数化することを学生に告げ、導入の段階でその具体的な規準をプリントで示した。各学生の成績は、二回分の発表の点数の合計に、質問や意見の回数を点数化して加点し、それを基準に判定した。
シラバスに記載してある通り、課題のレポート、授業中の発表と質疑応答、出席率を総合的に判断して成績を出している。欠席について、本学には忌引きなどの制度がないが、事前に連絡があり、やむを得ないと判断される欠席は配慮している。
授業中の発表、期間途中のレポートと最終レポート、学期末試験、及び授業への積極的な参加を総合的に判断した。
定期試験に加えて、中間試験（確認テスト2回）、出席状況
丸暗記したものをそのまま書くというのは、授業目的にも沿わない上に、何より思考力、構成力、文章力の養成に全くつながらないので、論述式の試験ではあるが、できだけ大きなくくりで予めテーマを予告しておき、それをもとにして試験準備をしてもらい、実際の試験では、各自が独自に設定した小テーマについて、分量を設定せず、自由に論述してもらい、その内容を吟味し、成績を出した。どのような小テーマを設定したかも評価の要素とした。斬新な発想にはそれなりの評価を与えた。
平常授業の際の予習状況、レポート試験ともに100点満点で評価し、シラバスで記した通り、平常点60%、レポート40%で計算した。おおよその規準としては、優れていると判断できるラインを80点、若干足りない点はあるが一定の努力は見られるラインが70点と設定している。
シラバスの記述通り、平常点10%、課題20%、学期末試験70%で評価した。将来漢文教育に携わることを想定し、実際にきちんと書き下しや日本語訳といった漢文教育のために基本的な力が身についているか、また授業中に説明した基本的知識を覚えているかを重視し、試験中心で評価している。
試験であれば、出された問いに対応する答えができているかどうか、正しい答えができているか、総じて伝える能力が高いかどうか、という点を見ている。 集中講義等であれば、授業でのアクティビティが中心となるため、活動を評価している。
授業のために使われる週当たりの学習時間は少ないような気がするため、定期的に課題等を課すことを考えるか、あるいはグループワーク等、課外で集まらざるを得ないものを導入するか、今後は授業外でのことにも意識を持ちたい。 ただし、少し忙しすぎるため、実現は難しいと考えている。

出席(30%)、定期試験(70%)の割合で成績を決定した。ほぼ9割の学生が授業を欠席することなく講義に参加していただいたので、定期試験についても優秀な結果となった。
レポート（講義内容を理解できているか、それを自分の言葉で表現できているか、が重要。その上であれば、批判的な評価も歓迎する） 平常点（出欠，受講態度など。当たり前に人の話を聞いていられるかどうか程度のラインしか引いていないので、こちらは基本的に甘くなっているはずである）
普段からの授業態度と小レポートおよび学期末試験の評価をもとにして成績を評価した。
出席状況を加味するが（欠席過多は失格）、基本的に期末試験の点数で評価した。
出席点、授業参加度、コメントシート、期末レポートによって総合的に評価した。
出席点、各種課題、小テスト、レポートによって総合的に評価した。
・発表およびコメントシート：分量と質（90分間発表しきることができたか、独自の考察が含まれているか、その考察には客観的な根拠があるか、レジュメの形式は守られているか　等）。 ・レポート：発表時に指摘した問題点が改善されたか。 ・くずし字：ひらがなが習得できたか（最終テストにおける正答率で算出）。 以上の点を総合的に判断した。

アンケート結果を受けて改善したいところ　【人文社会系】
受講生とのコミュニケーションという面では、多人数を相手にする講義で難しいのですが、授業中に質問をする程度が限界です。「何か質問があればどうぞ」という投げかけは毎回していますが、全く質問はありません。この授業のための学習時間が「なし」という割合が、地誌概説Ⅰについては34.4%と高いので、課題を別途出すなどの改善を進めたいと思っています。その他の授業では特に改善の必要は感じていません。
使用したテキストは幅広い領域をカバーしているものの、事実の羅列が中心で、実際の使用方法に関する説明が不十分であったかもしれない。履修しているすべての学生が教員志望とは限らないので、今後テキスを選定する際には、もう少し実践的な内容のものも含めて検討したい。 履修者数が多いため、かなり意識して大きな声でしゃべらないと後ろの方まで声が届かないようである。今後はマイクを利用するなどして改善に努めたい。
難易度については、高いと回答する傾向にあるが、国文学演習ＡⅡ・ＢⅡにおいては、主に蔵書の問題で、学外の図書館を使用しなければならないこと、小説の訓詁注釈を行う技術の修得が難しいことなどが上げられると予測している。しかしながら、授業で行っていることは、標準的な国文学演習の内容であるし、また、注釈作業が比較的行いやすいものの、教育的効果が高い作品を選択している。今後、更なる作品選定の工夫を行いたい。ＣⅡにおいては、分析対象のメタ言説の読解を行ったが、日頃行うことが少ない作業であったで、難しいと感じたものと推測される。こちらも今後、教材選定を工夫したい。
レジュメの作成や配布の仕方についてはより丁寧に指導していきたい。また発展的な学習をできるように授業内で工夫したい。
本授業科目は、専攻主任と4年生との連絡を主として設定されているため、授業内容に焦点を置くだけでなく、その他関連のあることを行う必要があった。そのため、授業進度が不十分なところもあった。この点に関しては、できる限りは改善したいと考えているが、どこまで可能かは不明です。
「週当たりの学習時間」と「教材・教具のわかりやすさ」を改善する必要があると感じた。 今後は、教科書を指定することを通して、学習内容の全体像が見えるようにし、事前学習の時間を増やすなど、工夫していきたい。
受講生達の頑張りに甘えて、授業のレベルをドンドン上げてしまったのかも知れない。でも、それができたのも愛知教育大学であったからこそであろう。
問15の週当たりの学習時間の確保があまりできていないようであった。 次回からは、何らかの課題などを出すことで、予め学習できるような取り組みをしていきたい。
授業の難易度をもう少し上げたい。3年生になったばかりの学生が調度いいレベルでは専門科目としては平易すぎるように思う。少し難しいと感じるぐらいでないと、知的欲求を刺激できないと思う。 好意的にアンケートに回答してくれたようだが、ICTを用いるなど、発展的な内容を取り扱う余裕がなかったように思う。他の科目にも発展的に利用できる知識や調査方法なども教授していきたい。
アンケート結果を見ると概ね好評であったことがわかるが、一点、「週当たりの学習時間」の項目で低評価が目立ったので、今後は、授業に即した課題の提示を心掛けたい。
授業への直接的なコメントとしては、「プレゼンテーションソフトのスライド切り替えが速い」（異文化コミュニケーション論）、「学生の理解度をみながら、授業のスピードを調節してほしい」（言語学研究I）があった。 前者については、多人数相手の講義であり、悩ましい問題である。スライドのすべてをメモしようとせず、要点だけをメモするように伝えているが、それでもやりにくいだろうと思う。あらかじめ簡単なハンドアウトを配るなど、やり方はあったが、授業準備にも十分な時間を割けないほど多忙な状況で、実現しなかった。 後者については、決して授業者の目標だけにしたがって授業を進めているつもりはなかったが、コミュニケーション不足であったことは否めない。今後は改善していきたい。

英語講読については少し難しいぐらいがちょうど良いと考えていたので、難易度に対する回答の44.4%が「ちょうどいい」、55.6%が「難しい」であったのは、或る意味「適切」であったのではないかと思う。しかしながら、語学の習得はそう簡単なことではない。半期で本一冊を読み切るぐらいの「スパルタ」も時には必要ではないかと思うが、そこまで踏み切るほどの「勇気」を私は持てなかった。学生の外国語に対するやる気と能力には大きな差があるため、どの程度の量を読ませるかについては、今後も試行錯誤を繰り返していくことになると思う。 多読に慣れてもらうため、読むスピードを徐々に速めていきたいと考えていたが、なかなか速められなかった。短時間で段落の要旨をつかむ訓練を、もっと効率的にできれば良かったと思う。
映像のナレーションと私の講義の説明が重なってしまい、私の言葉が聞きづらかったという指摘があった。映像の提示と説明・講述の区別をより明確にし、メリハリを付けて講義するよう、一層心がけ、改善したい。
受講者おいて「なぜ学ぶのか」の動機づけを明確にさせることを心掛けたい。
もう少し日程に余裕を設けたらと思う。
こちらとしては同じように行っているつもりの授業が、学生にとって必修か選択かという点で結果がかなり異なっているようである。この点は大変興味深かった。 前回のアンケートでは、受講生の人数が多くなるほど学生の満足度が下がる傾向が見られたことを記憶している。ひとりひとりにかける時間がどうしても制限されてしまうことに起因すると思われたため、可能な限りひとりひとりにコメントをつけるようにしたのだが、今回のアンケートでは、同じくらいの人数であれば、必修より選択の学生の満足度が明らかに高かった。また同じ授業で必修の専門の学生と選択必修の専門外の学生が混在している授業については、新しい考え・知識・技能が身についたかという点や、自分で問題点を深く考えたかという設問への回答が異なる傾向が見られた。 これらの違いを踏まえて、どのように学生の興味に沿った授業を展開していくかを今後の課題としたい。
クラスにより多少の差はあるが、６～７割程度の学生が満足している（問１２までの項目で①②を足した割合）ようなので、授業として大きな問題はないと考えるが、内容が難しい、難しすぎるが４～５割あるので、その点は質を落とさないで改善したいと考えている。
伝え方を工夫していきたい
授業者と受講者の間で、若干の齟齬があるので、受講者の受講目的と授業者の教育目標が一致するようさらにコミニュケーションを深めていきたい。
本授業では少し難しめの文章を読むことで、学生の読解力の向上を図っているため、「授業の難易度」の「ちょうどいい」55.6%、「難しい」44.4% は意図通りの結果と言えるが、その一方で「一回当たりの授業内容の量」については「少ない」11.1%、「ちょうどいい」77.8%、「多い」11.1% と若干甘めだったようである。実際、「この授業のための週当たりの学習時間」についても「3時間以上」は11.1%のみで、「2-3時間」が55.6%、「1-2時間」が22.2%であり、「1時間未満」も11.1%見られた。これは明らかに本来期待している学習時間には不足している。もう少し負荷をかけて、個々人の努力を求めるべきかと思われる。
漢文学Cについて問10が非常に低く出ている。おそらく板書事項が多いために十分消費できていないのかと思われる。一因として、課題が未消化の学生が多く、結果として課題でクリアしていてほしい事項についてもこちらが板書せざるを得ない状況があると考える。課題をもう少しきちんとやってくるよう工夫するのと同時に、こちら側としても情報を効率的に提示するやり方を考えたい。
授業のために使われる週当たりの学習時間は少ないような気がするため、定期的に課題等を課すことを考えるか、あるいはグループワーク等、課外で集まらざるを得ないものを導入するか、今後は授業外でのことにも意識を持ちたい。 ただし、少し忙しすぎるため、実現は難しいと考えている。

授業の難易度が「ちょうどいい」という回答が88.2%であるのに対し、「授業を受けたうえで、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し新たな思考を展開した、さらにその思考に基づき行動した」という項目については「どちらともいえない」「あまりそうは思わない」という項目に約62%が当てはまると回答していた。授業内容からさらに関心をもって調査、思考を進めるということがまだ弱いと思うので、講義終了後も関心を持っていただけるような内容や指導を今後行っていきたい。
毎回反省される点だが、受講者との双方向的なコミュニケーションをより活性化させることが、教える側・教わる側の双方にとってのメリットがあると感じる。そのためには、単に教科書の解説にとどまらず、学生の個々の問題意識を引き出してそれを深めていくような課題設定やアプローチを試みる余地がまだ多くあると思われる。
授業内容の量が多いという声がやや多めだったので、少し内容を整理したい。また、声が聴きとりにくいとの声もあったので、マイクの音量の調整を含め注意したい。
『史記』を取り上げた時のような双方向の授業がもっとできるよう工夫したい。
漢字についての学生の関心は比較的高いことが分かったので、学生自身がさらにみずから調べ考えを深めていけるよう、授業方法を考えていきたい。
問13「授業の難易度」では、「難しい」という解答が半数を超えていたので、難易度をしっかり見極めながら授業を行いたい。